

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

宇佐美 まゆみ (宇佐美)

学位申請者 李 恩美

論文名 「日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究
ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」

結論

李恩美氏から提出された博士学位請求論文「日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、宇佐美まゆみを主査に、副査として、学内の富盛伸夫、南潤珍の両氏に加え、本学在任中、李恩美氏の修士論文の指導等にご協力いただいた井上史雄（明海大学外国語学部教授）、田島信元（白百合女子大学文学部教授）のお二人を学外からお迎えした5名で構成された。

論文の概要

本研究は、円滑な人間関係を保つための対人配慮が日韓両言語の言語行動にどのように反映されているかを、文レベルの言語行動であるスピーチレベルと、談話レベルの言語行動であるスピーチレベル・シフトとヘッジに焦点を当てて、ディスコース・ポライトネス理論（以降DP理論）の観点から総合的に分析し、日本語と韓国語の言語行動、及び、ポライトネス・ストラテジーの特徴を明らかにしたものである。また、両言語の初対面二者間会

話の DP 理論で言う「基本状態」を実証的に明らかにすることによって、理論の検証にも貢献している。より具体的には、自然会話において、スピーチレベル、スピーチレベル・シフト、ヘッジという言語行動が生み出す機能に、対話相手の年齢、性別がいかに関与を与えるかを明らかにしようとする。そのために、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論の見積もりの公式 ($W_x = P(H, S) + D(S, H) + Rx$) の枠組みを借りて、Distance 要因を統一するために初対面会話を扱い、その上で、Power 要因の指標として年齢を捉え、35 歳前後のベース協力者に対して、男女の対話相手の年齢を 45 歳前後(上)、35 歳前後(同)、25 歳前後(下)に統制し、会話を収録したものである。

本論文は 300 頁を超える全 9 章からなる本文と、約 350 頁に及ぶ自然会話の文字化資料を中心とする「資料集」から成っている。

第 1 章は、先行研究の批判的検討をした上で、本研究の概要とアプローチを示した章である。ここでは、まず、これまでの日本語と韓国語におけるポライトネスの研究が、ポライトネスを単に「言語形式の丁寧度」とみなして、敬語及び待遇表現の研究と同一視・混同する傾向があったことを問題点として指摘する。その上で、ブラウンとレビンソンの「ポライトネス理論」、宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」を概観し、本研究の分析対象の一つである「スピーチレベル」を従来のように「敬語」という観点から分析するだけでなく、談話レベルにおけるスピーチレベルのシフト操作、及び、発話機能を緩和するものと定義される「ヘッジ」と関連付けて、談話レベルから総合的に分析するという手法と観点の新しさを提示している。また、条件統制された質の高い自然会話をデータとして、談話レベルで分析することの意義を述べている。

第 2 章では、本論文の方法論の基盤である「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」がまとめられ、実験計画、インフォーマント、実験手順、会話データの収集、文字化の方法などの具体的な研究方法が詳しく提示されている。特に、韓国語の話し言葉の文字化の方法については、BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) を参考に、BTSK として、韓国語の特徴を組み込むための工夫とその具体的方法が示されている。

第 3 章では、データ収集の際に行ったフォローアップ・アンケートの結果を分析し、対話相手の年齢・社会的地位の認知や、採集された会話データの「自然さ」など、本研究で

扱うデータの「妥当性」が確認され、データの質の高さを保証している。

第4章では、本研究の第一の分析対象である文レベルの言語行動としての「スピーチレベル」の結果が提示される。日本語と韓国語の初対面社会人二者間会話においては、ともに、「敬体」がDP理論の用語でいう「無標スピーチレベル」であることを示す。その上で、日本語では、「丁寧度を示すマーカーのない発話」をより多く使用することによって、「敬体」や「常体」といった発話文末の言語形式や尊敬語などが、年齢など対話相手との上下関係を明確にマークすることをあいまいにしようとする傾向があることを明らかにした。それに対して、韓国語では、発話文末の言語形式や尊敬語などの使用に、年齢などの対話相手との上下関係が強く反映されており、「敬語使用の規範」により忠実に従った言語行動が行われていることを明らかにしている。

続く第5章では、「スピーチレベル」を談話レベルで動的に捉えた「スピーチレベル・シフト」について分析する。日本語では文レベルの言語行動である「スピーチレベル」には、対話相手の上下関係が反映されなかったのに対し、談話レベルの言語行動である「スピーチレベル・シフト」においては、年下の対話相手に「ダウンシフト」がもっとも多いという形で、年齢という上下関係が反映されていることを明らかにした。一方、韓国語では、シフトの振る舞いも、対話相手との上下関係を顕著に反映するという結果を示した。これらのことから、言語行動を対人コミュニケーションの観点から総合的に捉えるためには、文レベルだけではなく、談話レベルから総合的に分析することが必須であることを示した。

第6章では、発話を緩和する機能を持つ「ヘッジ」を、談話レベルから分析している。その結果、日本語のほうが韓国語よりヘッジが有意に多く用いられており、ヘッジが円滑なコミュニケーションを図るためのポライトネス・ストラテジーとしてより重要な役割を果たしていることが指摘された。一方、韓国人男性話者においては、年上に対して最もヘッジの使用が多いなどの結果から、韓国語においては、ヘッジも「敬体」と同様、上下関係を反映するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとなっていることが明らかになった。

第7章では、敬体、常体等、各スピーチレベルとヘッジの共起関係から、文レベルの言語行動であるスピーチレベルと談話レベルの言語行動であるヘッジの関連性が考察される。日本語・韓国語ともに、ヘッジは発話文末のスピーチレベルの中で「常体」とともに使わ

れる割合がもっとも高いことから、言語形式の丁寧度が低い場合に、「ヘッジ」という言語装置を補うことで発話をよりポライトにするというストラテジーがとられていることが明らかにされる。特に日本語においては、「スピーチレベル」が、相対的に言語形式の丁寧度の低い「常体」と「丁寧度を示すマーカのない発話」の時に「ヘッジ」の使用割合が高くなっており、日本語においては、スピーチレベルとヘッジが、「相互補完的」に働いていることが明らかになった。一方、韓国語では、ヘッジは、敬体が使われている年上に対してもっとも多く使用されており、韓国語におけるヘッジは、スピーチレベルに加えて、年上の人へのポライトな言語行動をさらに強化するような「付加的な役割」を果たしているということが明らかになった。

第8章では、第4章から第7章までのスピーチレベル、スピーチレベル・シフト、及びヘッジの分析結果を、DP理論の観点から総合的に考察している。スピーチレベル、スピーチレベル・シフト、及び、ヘッジの振る舞いを、無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態を構成する要素として捉え、日本語と韓国語の「社会人初対面会話」という談話の「基本状態」を同定することによって、そこから離脱した言語行動(有標行動)がもたらすポライトネス効果を相対的に捉え、異文化間ミス・コミュニケーションの未然の防止に生かすことができるという応用的観点からの指摘がなされる。

第9章は、本論文の総括にあたる章である。一見、互いに関連のないように思われるスピーチレベル、スピーチレベル・シフトとヘッジという3つの言語行動の分析結果をもとに、スピーチレベルの各レベルとヘッジの共起関係という観点から、スピーチレベルとヘッジを一つの枠組みの中で捉えることによって、スピーチレベルとヘッジが、相互に密接に関連しながら、対話相手へのポライトネス・ストラテジーとして、動的に機能しているということが明らかになったとまとめる。また、日本語は韓国語に比べ、「話者個人の方略的な言語使用」の側面が強く、韓国語は日本語に比べ「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」の側面が強いことが明らかになった。これらの結果に基づき、日本語と韓国語ともに、「円滑な人間関係を保つための言語行動」としてのポライトネスは、単に「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」のような、敬語使用という「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」のみによって実現されているのではなく、「丁寧度を示すマーカのない発話」や「ス

ピーチレベル・シフト」、また「ヘッジ」のような「話者個人の方略的な言語使用」と共に動的・総合的に実現されるものであることが主張される。最後に、残された問題への対処の見通しと今後の研究課題が述べられている。

審査の概要及び評価

審査委員会は、以下の5点を極めて高く評価した。①会話分析の先端的方法論を適用し、この領域においては大量といえる日本語、韓国語両言語の話し言葉のデータを収集・コード化し、一つのコーパスになりえるものにまで整備したこと。特に、韓国語の会話データに関しては、これほど条件を統制して収集された大量の自然会話データで公開されているものは、ほとんど皆無と言ってよい。データ自体が貴重で、その価値は極めて高く、韓国語の談話研究にも貢献するものである点。②条件統制して収集・整備された質の高い話し言葉データに基づいて対照研究を行うことによって、日本語、韓国語単独の分析からだけでは明らかになりえなかった特徴を明らかにした点。また、これまで少ないデータを定性的に分析するにとどまっていたこの種の研究において、一部を除き、自ら収集した大量データに基づき、定量的な分析や、統計的検定を行うなどして、結果の信頼性を高めた点。③大量のデータ、精緻な方法論に基づいて明らかにされた日韓の言語行動（敬語、待遇表現、ポライトネス）の特徴は、DP理論の観点からは、それぞれの言語における初対面会話における言語行動の「基本状態」が実証的に明らかにされたということであり、その意義は大きいこと。また、本研究がこの理論を実証的比較文化研究に用いる際の処理方法を提示し、実証データを提供したことによって、DP理論にも貢献している点。④話し言葉データをより広い談話レベルの観点から総合的に分析することによって、従来、質問紙調査による研究が圧倒的多数を占める日韓両言語における敬語の対照研究にも、新たな知見を提供した点。⑤本研究で導き出された日韓両言語の特徴（基本状態）は、それを主要なパラメーターとして異文化間コミュニケーションを捉えていくための基礎を提供するものであり、日韓のコミュニケーションにかかわる誤解や違和感を未然に防ぐことに貢献することが期待される。また、日本語教育、韓国語教育の実践的な教育場面に適用できる知見など、応用への示唆も数多く含んでいる点。

各審査委員より指摘のあった改善の余地のある点は以下の3点に集約できる。①日韓のコミュニケーションの特徴が浮き彫りになった点は興味深い、一方で、ポライトネスの普遍性についての考察が少々希薄である点。②より広い理論的枠組みとの関係や、DP理論の展開に関する議論や今後の展望が十分とはいえない点。③データについては、さらに多様な処理が可能である点。

しかし、以上の3点は、むしろ本研究のスケール、今後の展開の可能性への期待の大きさ、及び、収集された質の高い自然会話データの貴重さに起因するものであり、論者の力量を高く評価するからこそ生じた指摘であることは言うまでもない。また、こうした指摘に対する論者の口述試問での応答は、それらの諸点を既に自覚していたと判断できる適切なものであり、また、今後の改善についての見通しと方法論を持っていることを確認できるものであった。

上記のような点を総合的に勘案した結果、審査委員会は全員一致して、申請者 李恩美氏の博士学位請求論文が、課程博士の学位請求論文としては出色のものであり、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。